

『真のケアすること』とは？

～父の介護体験（*娘たちのケア行為）から再認識したこと～

茨城県立つくば特別支援学校

中部学院大学・通信教育部（社会福祉士コース）5年

福井 正人

私は現在、特別支援学校で<ケア>等の業務に従事しています。一人息子である私は、いまから約12年前に、母と父の介護にあたりました。そのなかでの体験（*具体的には、娘たちの行ったケア行為等）から、改めてする側のケアにおける根底的なところを強く認識させられました。今回、そのことについて述べたいと思います。

父は、肝臓がんで、特に亡くなる前の二年間ちょっとは、大部分が要介助の状況でした。ただ、間際まで意識は割とハッキリとしており、ある程度判断力もあったように記憶しています。父にとって、闘病生活は辛かったと思います。しかし、母と精一杯対応し（たつもりで）、父もその都度、「有難うな…」と言ってくれました。満足してくれていたと思っていました（思い込んでいました……）。確かに、父は息子と違い、気配りができる男ひとでした。

そんな闘病生活の後半のあるときに、娘（*父からみると孫）たちが、下手ながらも父が何より大好きだった『ゴルフ』の経験を感じてもらいたいと企画をしました。簡単な弁当を持って、皆で近くの広大な芝生が広がる公園へ行きました。車椅子の父を囲んでラウンド？をしに行きました。お昼に、娘たち手作りのおむすびとたまご焼き等を食べました。

そのときに娘たちの発案で、父のもう一つの趣味というか、相棒というべきか『お酒』を感じてもらうこともしました。当然、医者からお酒は厳禁で止められています。でも、娘たちはこのように言い、計画を立てました。「なんとかおじいちゃんに大好きなものを味わってもらいたい。」それは、“嗅覚”の活用です。酒の“匂い”を父に嗅いでもらい、その後でお茶を飲む、その繰り返しです。この行事的なことをそれから月に2回程、後半の（入院するまでの）在宅介護期間に約一年間続けました。

それから半年後、父は旅立っていきます。なお、この人生最後の半年間は入院することになりました。この入院期間に関しては、主治医の方針等もあり、一度も外出（泊）することは叶いませんでした。また、入院後に誤嚥性肺炎を併発したことから口から食べる（食べさせる）ことは禁止となり、鼻からの栄養摂取という状態でした。このときも、娘たちは（*主治医の許可のもと）大体週末（金、土曜日）に、このようなことをしてくれました。

(午後) 6 時頃に来て、まず花柄のシートを敷いたお盆に馴染みのお茶碗、お椀、お皿をセットし、それにタッパにいれてきたごはん、わかめの味噌汁、たまご焼き等を備え付けの電子レンジで温めます。それをお椀等にそれぞれ移し替えます。そして、最後に父が特に目がなかったワンカップのお酒の蓋を開けて添えます (*お酒も一旦レンジで温めてからワンカップに、もどしていました)。シンプルながらも“愛情”のこもった、父への“思いあふれる”料理で“おもてなし”をしてくれました。口から食べられなくなってから、約三カ月間ほぼ定期的に行ってくれました。旅立つ直前まで創ってきてくれました。

いま思えばその三カ月間、父はとても平穏でした。原疾患のために痛みやだるさ等があったと思いますし、死への恐怖も……と過ります。しかし、父は最後まで穏やかでした。むしろ活気があったような気がします。とりわけ週末の夕方頃になると、より活動的だったように思います。そして、偶然なのか、それとも何か魂が、気持ちがそうさせたのかわかりませんが、慣例の娘たちの“おもてなし料理”を感覚的に味わった後に、安らかに、とても満足そうな気分で (顔つきで) 旅立っていきました。息子として、とても嬉しかったと記憶しています。

父が亡くなって落ち着いた頃、母から父が発したある語りを聞かされました。それは、末期の折、着替えの介助をしているときに、“ボソッ”とこうつぶ

やいたそうです。「もう一回”あの公園”に行って、酒を味わいたいなあ……」。

深いところで、このつぶやいた言葉（“思い”）の解釈はいろいろと思います。

ただ、父が何気なく語った文脈のなかの“もう一回……”というフレーズは、そ

のときの最も“強い思い”を表し、“願い”を指していたのではないかと考えま

す。

私はこの経験を通し、（恥ずかしながら）改めて『真のケア』について考えさせられました。「自分は、真のケアを行っているのだろうか？形だけではなかったか」。よりよいケアの実践、ケアの質を高め、対象者等の QOL の向上に結び付けていくためには、「隠されている『真のニーズ』をいかにつかみ切り、それに対応・支援していくか」ということにかかっていると痛感しました。そのためには、当事者の観点、意識（気持ち）で考えていき、観察、対話等を通して総合的に、相補的に「より（もう一步）深く捉えていく」こと、それともう一点、「“諦める”前の（もう一段の）思考」が必要ではないか、ということ（娘たちから改めて）認識させられました。今後のケア実践において、再度心に刻んでおきたいと思っています。“もう一回……”といってもらえる『真のケア』を目指していくためにも……。

（1947 文字）